

全作物共通

天気は数日の周期で変わり、平均気温は高く、降水量・日照時間はほぼ
平年並の見込みです。（※気象庁1ヶ月予報より）

- ①ハウスは、夜間の保温に努めるとともに、日中の換気はこまめに行い、
温度の確保と過湿状態の緩和を図りましょう。
- ②各種病害虫の発生に引き続き注意し、適期防除を行います。防除は、薬
液が確実に乾く時間帯に散布を行いましょう。
- ③強風や大雨に備え、ハウスの点検補修や周囲の排水対策を講じるなど、
防災環境を整えましょう。

※農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前
日数に十分留意して使用ください。

- ◆農薬の使用に当たっては、使用基準を必ず守りましょう。
なお、品目ごとの栽培防除体系を基に減農薬でクリーンな野菜生産を実践しましょう。
- ◆防虫ネット・近紫外線カットフィルム・粘着シートなどを活用し、
適切な栽培管理と合わせ、病害虫の発生を最小限に抑制しましょう。

※この情報は、上川農業改良普及センター本所地域(旭川市、鷹栖町、当麻町、比布町、
愛別町、上川町)向けに作成されています。
気象・土壌条件・作業体系から当地域以外には、適用されませんので十分ご注意ください。
(不利益・損害などが発生した場合、当方は責任を負うことはできません)
※掲載されている農薬情報は、令和5年9月6日現在の登録内容となっていますので、
活用の際は、あらかじめ安全使用基準を確認くださいますようお願いいたします。

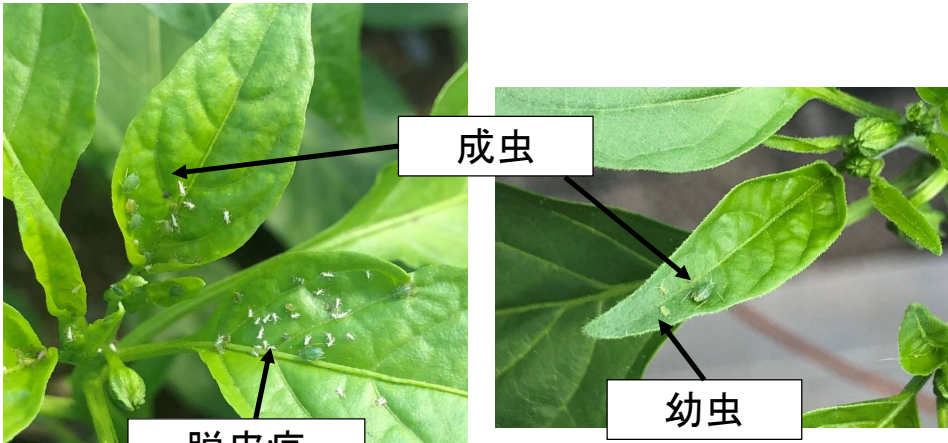
■□■□■□■□■□ GAP手法の活用 □■□■□■□■□■
【労働安全編】
—作業安全確保のために必要な対策—

＜健康状態の把握と休憩＞

- ・挨拶や朝礼で従事者の健康状態を確認するとともに、従事者が体調不良を感じた場合
は、申し出やすい環境の整備に努める。
- ・疲労が蓄積しないよう、意識して定期的な休息を取るようにする。また、無理のない、
余裕を持った作業計画を立てる。

＜3S（整理・整頓・清掃）活動を行う＞

- ・3S活動ができていないと、置くべきではない場所に物が置かれ、物の運搬や道具の確
保に手間取ることや、作業スペースが確保できないことで、事故が起こりやすくなる。
- ・使わない機械や道具、廃棄物は、ほ場や農産物取扱施設、その周辺に放置せず、片付
けやすい配置の工夫に取り組む。
- ・作業前の準備、作業後の片付けなど、日常作業の一環として定着させる。

作物名	ピーマン・ししとう・なんばん	
病虫害 生理障害名		
アブラムシ類		
発生状況		
中発生		
発生時期		
6月上旬～		
モモアカアブラムシ		

発生の状況・要因

- ・アブラムシ類の発生が見られている。
- ・モモアカアブラムシの体色は赤、緑、黄で、生長点付近や上位の新葉などに多く見られる。

対策

- ・多発すると防除が困難になるので、生長点付近をよく観察し、初発を見逃さないよう努める。
- ・生長点付近の未展開の葉や葉裏に寄生している場合は、薬剤がかかりづらいので、散布は丁寧に行う。

＜防除の一例＞カブリダニ類の導入時にも使用可能

ピーマン

●ウララDF	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内
●トランスフォームフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内

ししとう・なんばん（とうがらし類）

●スタークル顆粒水溶剤	3,000倍	収穫前日まで	2回以内
-------------	--------	--------	------

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

ピーマン

病虫害
 生理障害名

ハダニ類

発生状況

少発生

発生時期

8月下旬～



葉表の黄化症状



葉裏の黄化と褐変

発生の状況・要因

- ・8月から発生が継続しているほ場が見られている。
- ・葉表の黄変と葉裏の褐変症状が見られ、加害部位には微少なダニが見られる。
- ・密度が増加してくると細かな糸を網のように張り、その中に生息するため、薬剤が直接かかりづらくなり、防除が困難となる。

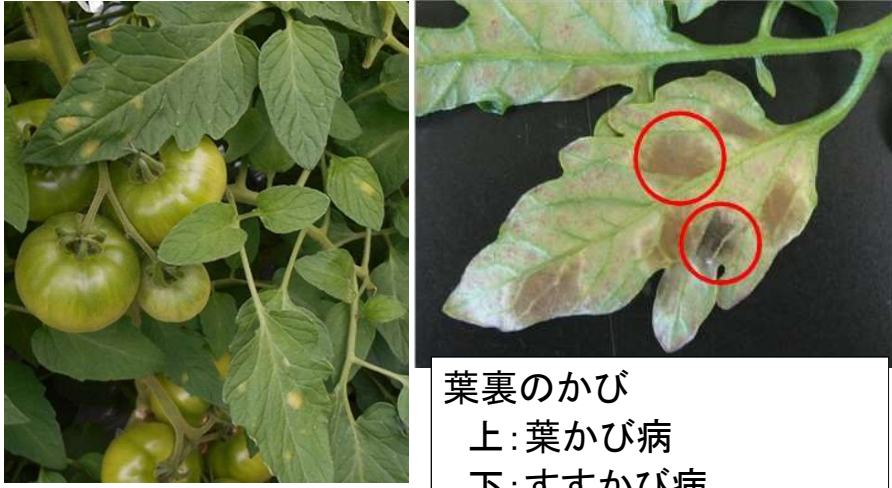
対策

- ・抵抗性が発達しやすいので各薬剤は年1回のみの使用が望ましい。

<防除の一例>

- ニッソラン水和剤 2,000～3,000倍 収穫前日まで 2回以内
- スターマイトフロアブル 2,000倍 収穫前日まで 1回
- コロマイト乳剤 1,000倍 収穫前日まで 2回以内
- モベントフロアブル（遅効的なため多発時には他剤と併用する）
 2,000倍 収穫前日まで 3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	トマト類	
病害虫 生理障害名		葉裏のかび 上: 葉かび病 下: すすかび病 (病徴では判別困難)
葉かび病 すすかび病		
発生状況		
中～多発生		
発生時期		
7月上旬～	葉表の病斑(葉かび病)	

発生の状況・要因

- 両病害ともよく似た病斑を形成し、葉裏にかびが見られる。
- 葉かび病は20～25℃、すすかび病は26～28℃で発生しやすく、共に多湿条件で発生が多くなる。



対 策

- ハウスの換気に努め、下葉の摘葉により通気性を確保する。
- 葉かび病は草勢が低下すると発生が増加するのでかん水不足や追肥遅れにならないように気をつける。
- 発生蔓延後の防除は困難なので、予防効果の高いダコニール1000、ベルクートフロアブル、微生物農薬等による予防的防除に努める。
- 発生が増加する場合は、被害葉の除去と下記の治療効果のある薬剤で防除を行う。

＜発生確認後の防除の一例＞（トマト・中玉・ミニトマト共通）

- アフェットフロアブル 2,000倍 収穫前日まで 3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	きゅうり	
病虫害 生理障害名	 	
アブラムシ類		
発生状況		
少～中発生		
発生時期		
6月中旬～	アブラムシが保毒するウイルスの被害を受けた株(R5年)	寄生するアブラムシ(R5年)

発生の状況・要因

- 葉の裏に群生し、吸汁害による茎葉の萎凋、排泄物による葉や果実の汚れが発生する。
- ウイルスを保毒するアブラムシの吸汁により、株が被害を受け、生育が著しく停滞する。

対策

- きゅうりでは葉裏の寄生により、葉表の褐変が見られるので、ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。
- 薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。
- ウイルス感染の場合は汁液感染が拡大するため、早期に株を抜き取り処分する。

〈防除の一例〉

- アドマイヤー顆粒水和剤
5,000～10,000倍 収穫前日まで 3回以内
- * 天敵殺虫剤（ミヤコカブリダニ）使用の場合は
- ベネビアOD 2,000倍 収穫前日まで 3回以内
- チェス顆粒水和剤 5,000倍 収穫前日まで 3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

園芸タイムリー情報
 ≪9月中～10月上旬版≫

令和5年9月25日発行 第5号

【上川農業改良普及センター】

Tel 0166-84-2017 Fax 0166-84-2009

E-mail : asahi-nokai.11@pref.hokkaido.lg.jp

HomePage

<https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/nkc/index.htm>

作物名

ウリ類（メロン・きゅうり）

病虫害
 生理障害名

ハダニ類

発生状況

中～多発生

発生時期

6月上旬～



きゅうり



メロン

発生の状況・要因

- ・葉の裏に寄生し、吸汁により葉の表に白いかすり状の斑点が現れる。発生密度が高くなると葉全体が黄変枯死する。
- ・高温乾燥を好むため、ハウスでは露地よりも早く発生する。

対策

- ・ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。
- ・ハウスでは、侵入しやすい出入り口やサイドなどの開口部付近を中心に、よく観察する。
- ・薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は年1回の使用にとどめ、ローテーション防除を行う。



<防除の一例>

●カネマイトフロアブル 1,000～1,500倍 収穫前日まで 1回
 （*天敵を導入している場合でも使用可能）

●コロマイト乳剤<メロン> 1,000倍 収穫前日まで 2回以内
 <きゅうり> 1,000～1,500倍 収穫前日まで 2回以内
 （*天敵を導入している場合はミヤコカブリダニに対し強い影響がある）

※上記2剤はハダニの全ステージに効果あり

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	あぶらな科野菜など葉菜類全般	
病虫害 生理障害名	ウスカワマイマイ	
ナメクジ類 カタツムリ類	 	
発生状況		
少発生		
発生時期		
通年	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">チャコウラナメクジ</div>	

発生の状況・要因

- ナメクジ・カタツムリは、ほ場周辺の雑草地、石の下、日陰など暗くて湿気が多い場所を好み、地中で越冬する。
- 葉の食害の他、這った痕の粘液の汚れ、本体やフンの混入が問題となっている。
- 雨天時や夜間は活発に活動する。
- 秋は発生が増加しやすいため、注意が必要である。

対 策

- 常発ほ場では通気を良くして湿気を放出する。
- ほ場周辺の雑草（特にコケ類）をこまめに除く（野積みの石や木などにも隠れています）。
- スラゴを使用する場合は作物周辺あるいは株元の土壌表面に散布し、作物に付着しないように気をつける。

＜防除の一例＞

●スラゴ 1～5g/m² (3.3～16.5g/坪) 発生時

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。